

「ミュアヘッド・フィールズの過去、現在、未来（その1）」

2022年2月
ブリック&ウッドクラブ理事会
(文責：中島健一郎)

2022年の春も間近です。

ブリック&ウッドクラブの創立は2000年5月ですので、今年で22周年を迎えました。ミュアヘッド・フィールズ コミュニティは2010年から住宅開発を進めており、こちらは12周年です。

最初の小さな波紋が広がっていくように、口伝えで増やしてきたメンバーの世代交代も少しずつ進み、SNSの発達等もあって今様々な経路でたくさんの人たちが集まってきています。ここに立っていると、この場所が当たり前のように存在し、私たちは当たり前のように日々楽しんでいます。しかし、ここに至るまでの道は決して平坦ではありませんでしたし、現在のブリック&ウッドクラブひいてはミュアヘッド・フィールズは所与のものではありません。年会費の支払やミニマムユースの消化だけでなく、「クラブの維持・発展のためにメンバーである自分にできることは何か」をメンバー一人ひとりが考え行動することがメンバー義務であり、そうした義務の上に様々なメンバーならではの権利があります。

新旧の多くのメンバーが、これまで来た道を知ることで現在を確かめ、そして将来につながる行動を起こす、そのために「ミュアヘッド・フィールズの過去、現在、未来」をお届けします。是非、毎回お読みください。

1. プロローグ

ブリック&ウッドクラブのゴルフコースは、どのホールも個性的で何度プレーしても飽きずに挑戦したくなる。平坦ではないグリーンは傾斜や曲がりを読み切らないと3パット、4パットは当たり前になってしまう。ボールをピンより上に着けて、少し強く打ったらどンドン転がり、加速がついてグリーンの外に落ちることもある。ゲストの中には「もう二度と来たくない。」という人もいるが、大半は「こんなチャレンジングなコースをいつか克服したい。」と、はまるのだ。

僕は高齢者になってから隣地の土太郎村（現ミュアヘッド・フィールズ コミュニティ）に引っ越して、週に2回は健康維持のためにも飽きずにラウンドしている。ドライバーの飛距離は落ちる一方だが、スコアは悪くても面白く回れている。「ここにボールを運ばないと2打目に苦勞するよ。」という天才設計者、ミュアヘッドさんの意図が分かってくると、失敗しても「そうなんだよな。」と納得してしまうのだ。

僕は新聞社のワシントン特派員になってから米国でゴルフを始めたのだが、帰国して日本でゴルフしてビックリした。まるでアメリカと日本のゴルフは違うのだ。日本のゴルフ場

に着くと玄関でキャディーさんらが、並んでお辞儀し、ゴルフバッグを運んでくれる。プレー中はクラブを手渡ししてくれるは、ボールは拭いてくれるはで、優秀なキャディーさんだと残りの距離やパットのラインまで教えてくれるなど至れり尽くせりなのだ。自分の直観とセンスでラウンドするスポーツとっていたし、ゴルフバッグは自分で運ぶのが当たり前だったのに。そして自分の仲間以外のプレーヤーとほとんど交流しないのにも驚いた。米国ではひとりでプレーに行くと適当に他の人と組み合わせてくれて、「ケン」とか「ジョン」とか名乗りあって楽しくラウンドした。ラウンド後はラウンジで一緒に飲食するし、家族が合流して晚餐を楽しんだりする。ところが日本では運転手付きの車が待機していて、レストランが閉まる時刻にはサッサと帰る。接待していたらしき人が車にお土産の手提げを慌てて突っ込む姿は何か滑稽だった。

だからバブル崩壊で準大手ゼネコンが投げ出したゴルフ場開発を坂征郎さんが引き継いだ時に「日本的でない本物のカントリークラブを創ろう」という思いを発起人8人は共有した。その詳しい内容は後で詳しく述べるが、ブリック&ウッドクラブは出発点から理想のクラブを目指し、紆余曲折を経ながらも唯一無二のクラブの実現を進めてきたのだ。そしてクラブの経営が軌道に乗った10数年前から、住宅とゴルフ場一体型の設計者であるミュアヘッド氏の遺志（世界中に100以上の作品を残し2002年に亡くなった。ブリック&ウッドクラブは最後の遺作である）を引き継ぎ、坂さんは土太郎村の開発に踏み切った。4期にわたる10万坪の開発は、資金繰りも含め苦難の連続で、そのことは後で詳しく記述するが、まずここでは現在の様子を少し述べさせてもらいたい。

2. コミュニティの住民として

実は僕は土太郎村の1期工事地区で2番目に家を建てた。本当は2期工事地区に長年の夢だった伝統工法の大きな土壁の家を建てたかったのだが、待ち切れず1期工事地区に小さな自然エネルギーハウスを建てたのだった。

それに先立ち、2010年の暮れに坂さん、光岡甫さん、児玉昇さんらとともに10数人でスウェーデンに自然エネルギーの事情を視察に行った。風力発電で電力の4割を賄っているマルメ市や、首都ストックホルムのエコビレッジなどを見学して我々は大きな刺激を受けた。翌2011年3月11日に東日本大震災が発生し、福島原発事故が起きた。宇宙船地球号を守るためにはスウェーデンに続けと、僕は東京電力とは結ばず、屋根のソーラーパネルと太陽熱利用の家を建てたのだった。この経緯も後で詳しく述べるが、2022年春の今、コミュニティにはなんと110軒の家が建ち、20軒が建築待ち。残り10区画の宅地が売れば開発は完了する段階だ。僕は5年前に、最初に建てた自然エネルギーハウスを弁護士さんに買ってもらい、2年かけて夢の土壁の家を建てた。都内の不動産は全て売り払い、土壁の家につき込み、住民票を移して今は千葉県民だ。

コミュニティとブリック&ウッドクラブは総称をミュアヘッド・フィールズとして一体化が図られているが、メディアにも沢山紹介され見学者が次々とやってくる。「ここは日本であって日本でない。ヨーロッパのようだがそれでもない。」「電信柱が一本もなくすがすがしい。」「都心から車で1時間くらいのところにこんな素敵なコミュニティが出現していたのですね。」「コロナ時代にはここでテレワークするのが正解ですね。」などの感

想に村民は嬉しくなった。

僕はコロナ禍が世界中を覆った今、パラダイムシフトを我々は迫られている、と感じている。グローバルなヒト、モノ、カネの流れは南北格差を広げ、金持ちと困窮者の貧富の差はすさまじくなったが、しっぺ返しのようにコロナという感染症に人類は襲われた。

そうした世界的災厄の中で、向かう先が見えず右往左往している日本にやや絶望的気分になりそうになる。しかし我々のミュアヘッド・フィールズは常に前進しており、その文化は稀有で、日本のあるべき姿のモデルケースと僕は思っている。

3. 「ゴルフ文化産業論」

最近、コミュニティ管理組合理事長の高橋敏夫さんが「この本は面白いよ。」と西村國彦著「ゴルフ文化産業論」（河出書房新社）を貸してくれた。その35ページから37ページにかけてミュアヘッド・フィールズが文字通りの“ゴルフ&コミュニティ”として紹介されていた。坂征郎さんという「変り者」がつくったとし、日本では、イノベーター（革新者）を世間は「変り者」というと述べていた。

以下は長くなるがその紹介である。

坂さんは日本人に珍しい「ヴィジョン人」である。60代で自然の中に生きる人生を選び、市原市でコメづくりからはじめコミュニティ「サステナブル・ビレッジ」を立ち上げた。

約10万坪のこの村は、お題目だけのサステナブルではない。道路、森、湖、農地、山、そして隣地にあるゴルフ場の数十万坪すべてが「コモنز」（共有地）であるという坂さんの思想に貫かれ実行されたコミュニティである。ここは、地球と同じ「閉じられた系」になっている。閉じられた「コモنز」において地下資源消費は、環境破壊しかもたらさない。

（中略）

すべては地上の自然系でまかなう。建物の木材は地産地消、エネルギーも地産地消、食糧は自給自足。村の運営は、直接民主主義で行う。痛快なのは住民がメンバーになっている自前のゴルフクラブである。ここには、未来のライフスタイル、「こうありたい」という生活イメージとともに人間本来のゲームの精神、カントリークラブの姿があった。

（中略）

「ブリック&ウッドクラブ」のメンバーは、自宅からゴルフ場へカートに乗って行くことができる。ここは敷地内は行政の及ばない私有地だからだ。「コモنز」の管理はすべて住民が話し合っている。私が訪れた時も、杉材で作ったレストランの一角から住民の談笑する声が聞こえた。その声の感じでピンときたのは、参加している人の文化度だった。

（引用終わり）

著者の西村國彦さんは1990年代、バブルのはじけた後のゴルフ場破綻をめぐる諸問題でメンバーの立場に立ち、外資からゴルフ場とメンバーの権利を守る戦いをつづけた弁護士だ。40歳から始めたゴルフにはまり、ゴルフジャーナリストとしても活躍している。東急不動産が中心となって、1993年に「ゴルフ&コミュニティ」と銘打ってゴルフ場付き戸建て付き住宅街として売り出した「季美の森ゴルフ倶楽部」の住民でもある。

西村國彦さんはゴルフ場と一体化した欧米のゴルフクラブのような生活をしばらくは楽し

んでいたのだが、東急もアメリカの住宅販売企画を形だけ真似た儲けのための「企業企画」を進めただけで「ゴルフ文化」をまちの根幹に据えていないことが判明した。つまり季美の森ゴルフ倶楽部は、単にゴルフ場施設管理業務を遂行する東急社員によって「施設使用料」を収益とするただのゴルフ施設産業に戻ってしまったのだ。

西村さんの嘆きは大きかったが、幸いなことに開発から20年たったころ季美の森の住民たちが自分たちの手で「まちづくり」に立ちあがった。ふたつも、まちづくりの団体ができ、まちの未来図を語り合うようになり、面白いことに、それに呼応して東急不動産の戦略セクションが参加して来たという。住民運営のレストランづくり、田んぼや畑を借りての農作物づくりといった多様なまちづくりが始まると、その住民たちと外部イノベーターとのコラボレーションを東急の戦略セクションがつとめたという。

その結果、順天堂大学、慶応SFC（湘南藤沢キャンパス）、東京都市大学の各研究室、学生や留学生らが「未来自然都市」構想を探求したり、ドローンの活用や本田技研と未来型スマート交通の実証実験をしたり、住民と協働するようになったという。そして季美の森にはパン工房、ベーカリー、イタリアンレストランその他の店が出店、いつの間にかグルメのまちの様相すら呈するようになったそうだ。

西村さんは、その季美の森を未だ発展途上にあるとして、文字通りの「ゴルフ&コミュニティー」こそが「ミューヘッド・フィールド」であると太鼓判を押してくれているのだ。「ゴルフ文化産業論」という本は、全編にわたり啓発される面白い本なので、多くの人に読んでもらいたい。

*日本人にありがちな「誰かがやってくれる」という傾向

*もうけでない活動は規制を受けずに自由に行えば文化は発展する

*許認可文化は進歩を阻害する

などの指摘は、「ウン、ウンそうだよね」と頷いてしまう。日本独自の預託金システムがバブル崩壊で会員権の紙屑化を招き、外資に次々と日本のゴルフ場が買収され、会員の犠牲の上に外資が極上の甘い汁を吸った、と指摘している。やられっぱなしの「マネー敗戦」の中で西村さんは弁護士として珍しく闘った人なのである。

さて「ミューヘッド・フィールドの過去、現在、未来」というタイトルで理事会は月に1本はメルマガに投稿する予定だ。それは西村さんが評価してくれた「ゴルフ&コミュニティー」としてのミューヘッド・フィールドの原点を振り返り、現状を吟味し、さらに未来を皆で構想したいからだ。だから僕だけでなく多くの方に「自分はこのようにブリック&ウッドクラブの発展のため活動した」、「この現状は変えたい」、「こんなゴルフ文化を築きたい」とか百家争鳴で投稿して頂きたいと思っている。